

レコードは楽しい

塚田 實

先日亡くなった親族の遺品整理をしていると、LPレコードが何枚か見つかった。クラシックと「哀愁のロシア民謡」だ。聴いてみようかと久し振りにレコード・プレイヤーにかけた。CDが主流になってから、レコード・プレイヤーは暫く動かしていなかった。

一九八〇年代半ば家電事業でアメリカのRCA社との付き合いが始まり、私も関わった。ビデオテープレコーダーのOEM(相手先ブランドでの製造)事業だ。家電事業部の推進役は、オーディオ好きのW氏で、丁度その頃同氏は、新しいオーディオ・フォーマット「CD(Compact Disc)」の普及「SONYと共に取り組んでいた。同氏の影響もあり、音楽の世界に更に引き込まれ、オーディオセットは日立と業務提携していた日本コロムビアのDENONブランドを買った。勿論レコード・プレイヤーも付いている。スピーカーは同氏の勧めで、アメリカのJBLから輸入した。

三十代後半から四十代前半の若い頃、LPレコードを七〇枚ほど蒐集していたので、これらのレコードを再び聴き始める。補聴器を付けたせいもあり、高音がとても良く響き新鮮だ。CDは人間の可聴域である20Hz-20,000Hzの間の音を取り出し、デジタル処理しているが、レコードはアナログ処理しているため、20,000Hz以上も記録するので、高音も伸びる。

七十枚ほどのレコード・タイトルをエクセルで整理してみた。CD蒐集がクラシック中心なのに対し、持っているレコードのジャンルは幅広い。シャンソンやカンツォーネにラテン、歌手ではビートルズ、ジョン・バエズ、ディオヌヌ・ワーウィック、ジョン・デンバー、フランク・シナトラ、ブレンダ・リー。クラシック指揮者はカール・ベームにオーマンディ、ワルター、シオルティ、カラヤン、またフルトヴェングラーのベートーヴェン交響曲第五番と第九番のレコードもあった。アジアの出張先でもレコードを買っていた。

リクライニング・チェアでコーヒーを飲み、レコードを聴きながら昔を振り返るのは楽しい。